怪

（かい）

綱淵謙錠

怪（かい）　©一九七九　検印廃止

価九八〇円

昭和五十四年七月二十日初版発行
昭和五十四年八月二十日再版発行

著　者　綱淵謙錠
発行者　高梨　茂
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一代表
振替　東京一―三四

作品集　怪（かい）　目次

恋（れん） 7
狼（ろう） 31
霊（りょう） 55
怪（かい） 89
約（やく） 113
冥（めい） 135

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

兆（ちょう） 149
脱（だつ） 179
獄（ごく） 205
魄（はく） 235
あとがき 268

装釘　山高　登

怪

（かい）

恋（れん）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

南無頓証菩提――

さらば、喜曾路どの。これからわたくし沖波与蔵は、あなたとあなたのお父君刑部左衛門どの の敵――十時辰之助めと笹野露休めとを討つべく、しばしの別れを告げに、この墓前にやって参りました。

ただいまわたくしは、ご覧のように、身を薦僧姿にやつし、名も空花と改めておりますが、まだ一片の尺八の曲をも習い修めてはおりませぬ。さればあなたへの手向けのひとふしも献げえないのは残念ですが、この次にこの墓前に立ったときは、敵の素ッ首とともに「虚鈴」「霧海篪」「虚空」の古伝三曲の他、尺八の秘曲のかずかずを手向けて、あなたさまの菩提を弔う所存にございます。なにとぞそれまでの淋しさを、お忍びください。ただいまこの尺八には、「笹の雪」

と名づけられた、先祖沖波家重代の名剣、五郎正宗一尺八寸を仕込んでございます。この秘剣がやがてあなたの敵を刺す日をお待ちください。

喜曾路どの。宮崎喜曾路は当松山城下、伊予の国（現愛媛県）一円、いな天下第一の美少年でございました。あなたの存在によって松山城はその光を増し、藩公の勢威も花のいろどりを添えられました。

「宗之は瀟灑たる美少年。觴を挙げ白眼もて青天を望むに。皎として玉樹の風前に臨むが如し」と杜子美のうたった催宗之もかくやとしのばれ、あなたを見た人でその美しさに感動しない人はおりませんでした。

しかもその人と為り清純謙抑、いささかも尊大傲慢の悪相に犯されず、聡明怜悧なること、文殊・普賢の再来かとも思われ、君寵の厚きこと、けだし宜なる哉と、貴賤上下ひとしく認めるところでございました。

わたくしは忘れることができませぬ。昨春、花のころ、あの妙法寺観音堂の桜のもとに、あなたさまが花を詠めてたたずんでおられたあの風姿を。小暗い花かげに、あなたのおられるところだけがほんのりと後光の差す思いがして……。

わたくしはその日、妙法寺の庫裏に城からの使いでみえたお小坊主の三夕どのの袖を引き、「あのお方はどなたさまで？」と、ぶしつけをもかえりみず、おたずねした次第でございます。

三夕どのはくるくるとよく回る眼を大きく見開き、得意そうに小鼻をピクつかせて、

「あのお方を知らん者は、松山城下のモグリじゃ」

といい、禄高四百石、足軽二十人を預かる宮崎刑部左衛門さまのご子息で、殿様の児小姓を勤められる喜曾路どの、とのこと。

この日からわたくしの魂は身を離れ、あなたさまにあくがれて、山野をあてもなくさまようありさまとなりました。

寺町の片陰に住まいする賤が男の、はかなき夢とは思っても、夢なればこそ慕わしさもつのるあわれさ。抜殻の身を、いっそいとおしく慰むる日々でございました。

しかしながら、日を経るにつれて愛念の情黙しがたく、いまこそは朝夕のけぶり絶えだえの、その日の生計も心もとなく、この妙法寺の下人として口に糊する身ではあるが、先祖は越前領主朝倉義景の家臣にて、沖波何某といえば少しは人にも知られた家柄、右府公（織田信長）に攻め滅ぼされてののち、伊予松山へと流れきたり、その末はかくもしがなく成り果てたとはいえ、武士の誇りはなおこの血脈にほとばしっておるわ、とわずかに勇気を掻き立てて、恥かしながら、その後また妙法寺にみえた三夕どのを頼みとし、あなたさまに文をまいらせた次第にござります。

忘れもしませぬ、あの五月雨の降り頻く夜、あなたさまは蓑笠に姿をやつされ、わたくしの住む、町はずれなる草の藁屋にお訪ねくださいました。

群がる好色漢どもの艶書攻めを歯牙にもかけられず、君寵身にあふるるあなたさまが、このわたくしの心根を不便とおぼされての御訪問。一夜の情は永遠の契りとただ夢のごとく、しのび音の口洩るさえもわけもなく心嬉しく、暁ふかく起きわかれ、ふたたび蓑笠に雨をしぶかせて五月闇に消えてゆかれた後姿は、あとに遺されたそこはかとない移り香と一本の扇子がなければ、現実とは思えぬからだの火照りでございました。

その扇面にしたためられてあった歌一首——

手枕の寝屋の扇の露よりも
いづれ形見に契りおかまし

ほんとうにこの扇が形見になってしまいました。

思えば憎ッくきはあの十時辰之助。侍大将十時三郎右衛門どのの次男という地位を虎の威として、あなたさまへの横恋慕。

うわさによれば、辰之助めがあなたを見初めたのは、去年の秋、お城の西の千本松原の馬場にて行われた馬揃えの折とか。藩公みずからのお出ましで、児小姓のこらず馬芸をご覧に入れることとなり、あなたは丈長なる黒駒に打ち跨り、燃え立つばかりの紅の緒にて組んだ面懸、胸懸、鞦の三懸をかけ、黒地に金銀で柏木に木兎を摺ったる鞍を置き、鐙ふんばり手綱かいくり、「ハイハイどうどう」の呼吸も隙なく、あゆませいでたるそのお姿には、「馬に乗る少年は清且麗」

と蘇東坡の謳った面影もこれほどではあるまいと、見物の老若で褒めぬ者はいなかったとか。

その輝くばかりのご容姿を辰之助は見初めて、お宅に出入りの小児医者笹野露休を呼び寄せ、身命をかけての艶書使いを頼んだとか。

露休も難儀には思ったが、虎の威なれば致し方もなく艶書をあずかり、機会をうかがっている折柄、ちょうどあなたが風邪を悩ませられ、勤めを引いて宿下りのよし伝え聞いて、好機到来とお宅にうかがい、あなたをお見舞申し上げたとか。

病いの床のつれづれ、露休の見舞を喜ばれたあなたは、ご機嫌よく四方山のお話をなさっているうちに、露休つくづくあなたの容色に魅入られ、まことに「朝顔の花暁露をふくむ」とはこのことかと、あろうことか、辰之助の艶書などそっちのけで、おのれがあなたさまへの愛恋のおもむき、直接に掻き口説いた厚かましさ。

さすがにあなたさまは色を正して申されるには、「われらこと、殿様のご不便をおかけくださる段、そなたもよく知っているはず。かりそめのたわむれといえども、今後二度とこのようなことは言ってはなりませぬぞ。もし重ねてかような不義無道のことをいうならば、以後わが家への出入りは堅く無用にされたい」と、おいさめになられたとか。

露休ひたすらに赤面して、その夜辰之助のもとへ行き、

「貴殿お頼みの艶書、今夕、よい機会があって喜曾路どのに遣わし、さまざまに申し上げ、せめ

てそのご返事なりと、と頼んだのですが、そのお文を手に取りさえしないばかりか、この段殿様のお耳に入れてやると申し、もっての外の挨拶でした」

と、まことしやかの作り話。

もともと辰之助は短気無分別な男なので、それを聞くと逆上し、

「古今、恋路のならいとして、文を送り玉章を通わすことはあたりまえのこと。しかるに喜曾路めは君寵におごり、さような悪言を吐きおったか。とにかく今宵喜曾路を斬り殺し、この恨みを晴してやる。その方ものがれぬところ、喜曾路が宿所に案内せよ」

と命じたのには、露休胆をつぶして驚いたが、後の祭り。

その夜の仕儀は、思い出すだに悲憤のもとでございます。

露休を先に立てた辰之助はお宅へ忍び入って、折柄南面の障子を開き、寝もやらず更けゆく月をながめておられたあなたさまに切ってかかりました。

物音を聞きつけ、「何者か」と、あなたは刀を執って立ち向われました。

「意趣は定めて覚えがあろう。十時辰之助だ、覚悟せよ」

と、辰之助は三尺三寸の大太刀をかざし、真一文字に打ってかかる。

あなたは何の意趣かわからぬままに、鋭い辰之助の太刀風に話合いの余裕もなく、抜き合わせてしばし切り結びましたが、刀に慣れぬとはいえ露休も必死の太刀先を向けてまいりましたので、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com